寄稿

3 私的和歌山論
― 四半世紀を振り返って

毎日新聞社　和歌山支局長
麻生幸次郎

支局長としてこの春、３回目となる和歌山勤務についた。この地に初めて赴任したのは２３年前、１９９４年春のことだ。四半世紀近く和歌山と関わり、多くの出来事に遭遇して多くの人たちから協力してもらい、時に激励され時に叱責を受けてきたことを、私は記者として感謝している。私的な経験と思いを交えながらこの間を振り返り、「第２の故郷」の来し方行く末を考えてみたい。

■「半島性からの脱却」目指して

９４年。その頃、なお「成長」は絶対的価値であり、バブル経済の崩壊という「つまづき」から立ち直ろうと世は模索していた。７月に世界リゾート博が和歌山市で開幕し、９月に関西国際空港が開港した。また、利便向上を図った新橋の建設を巡り、「歴史的景観権」の当否が争われた和歌山市の和歌浦の景観訴訟で、学者や住民が敗訴したのは１１月のことだ。

当時の仮谷志良知事が心血を注いできたのが、「半島性からの脱却」だ。東海道・山陽新幹線に沿った「国土軸」から外れた和歌山を、置いてきぼりにはさせない――。首都圏や阪神圏といった都市部とは異なる切実さをもって、和歌山は開発や成長に取り組んできた。

しかし、バブルの傷は深かった。９６年秋に阪和銀行が経営破綻して初めての一部業務停止命令が下され、後に経営陣は特別背任罪に問われる。担保にしていた土地価格の急落で、担保割れに陥る融資が相次いでいた。暴力団の関わりも指摘された。県商工信用組合も９９年に経営破綻し、やはり経営陣が刑事責任を問われることになる。

■バブル崩壊と震災

振り返れば９５年１月、神戸市などに甚大な被害をもたらした阪神大震災は、時代の変化を告げるかのような大災害だったと感じる。起債の活用など企業経営の手法を取り入れ、山を削って住宅用地を造成し、生じた土砂で海を埋

め立てて事業用地として売る。そんな開発行政で称賛された「株式会社・神戸市」。「官公庁もサービスを競い、個性を主張しなければ、真の地方活性化はあり得ない」と訴えた当時の市長の言葉は先見性に富んでいたが、震災後に神戸市は急速に地盤沈下していく。

バブルの崩壊とは「つまずき」でなく、転換点だったのだと思う。当時の私はそんなことを考える余裕もなく、次々起きる事件や出来事に追われていたが、その中にもバブル経済の傷痕が今になれば垣間見える。

９８年夏に起きた毒物カレー事件は、動機などが不明で釈然としない点が今も残る。ただ、その周辺で起きていた保険金詐欺事件などに、拝金主義の影響がみえる。同じ年の秋には和歌山市長が職員採用を巡る汚職事件で逮捕されるが、その前段ではバブル経済期に業者が購入した土地を巡る汚職事件があり、ここにも暴力団の影が差していた。

【世界リゾート博】
1994年に開催された世界リゾート博。人工島に建設されたパビリオンなどに、多くの人々が詰めかけた＝和歌山市の和歌山マリーナシティで

【南紀熊野体験博】
1999年に開催された南紀熊野体験博。山並みを背に開会の式典が催された＝那智勝浦町の那智勝浦シンボルパークで

ところで、この前年の９７年には和歌山市雑賀崎沖の埋め立て計画を巡り、景観論争が再び巻き起こった。この計画はその後中止される。港湾整備の必要性に対する疑念、景観や自然の価値に対する共感。取り巻く社会は変わっていた。和歌浦の景観論争とひとくくりにできないとはいえ、異なる方向に事態が進んだのは時代の変化を物語る。

さらにさかのぼって９５年の知事選では、県政の転換を掲げて出馬した前和歌山市長の旅田卓宗氏を前副知事の西口勇氏が破り、従来の権力構造が基本的には維持される。ただ、激しい選挙戦を通じて変革に対する県民の思いを感じた西口氏は、県政の修正を模索していたと思う。９９年に西口県政の下で開催された南紀熊野体験博は、イベントによる地域活性化という意味では世界リゾート博の紀南版だが、人工島につくった疑似欧州街が売り物だったリゾート博に比べると、熊野古道の自然や伝統が前面に出た熊野博は、後の「癒やし」への関心の高まりを先取りし、異なる色彩を放っていた。

■大阪の衰退と変化

私は２０００年春、６年間勤務した和歌山に別れを告げ、大阪社会部に赴任する。大阪でもバブルの後始末のような出来事に追われた。こうした大阪での経験も、和歌山を考えるうえで参考になる面があると思う。

０１年、大阪市は目指していた０８年五輪招致に失敗する。神戸市の後を追うように造成した人工島の開発が行き詰まり、これを打開するためという内向きで普遍性に乏しい理由が見えていたから、世界はおろか国内からも共感を呼ばなかった。この地でもバブル崩壊の傷は癒えていなかったといえる。

その後、在日韓国人系金融機関「関西興銀」の創業者の背任事件や、食肉卸会社「ハンナン」のトップに対する詐欺事件も取材した。それぞれの世界で「ドン」などと呼ばれ、政界や行政にも強い影響力を持った人物だった。さらに、談合を長年取り仕切っていたとされる「関西ゼネコンのドン」が失脚し、大手各社は０５年末に「談合決別宣言」を出す。

時の首相は小泉純一郎氏。自民党内の政争や、米国などが求める市場開放などが、背景にあったとも言わる。非正規の影響力の強さは、国際的な競争の公正さを阻害するというわけだ。同様の存在は、和歌山のさまざまな事件にも垣間見えていたが、大阪ではかなり影響力をそがれた。

こうした流れの中で登場するのが、橋下徹氏である。０７年に大阪府知事に当選した橋下氏がその後結成した大阪維新の会は、「特権」の排除をうたって競争を重んじる市場原理主義的な改革を売り物にする。橋下氏のもと、大阪の行政が培ってきたさまざまな団体とのパイプは、軒並み断ち切られ、残っても細くなっていく。地域の自治会組織、同和団体。経済界との関係も希薄になった。大阪市職員の隠語に「こなす」という言葉がある。難しい簡単ではない要求をしてくる団体や個人とうまく付き合い、時に“抜け道”を探して何とか良好な関係を保つことが、評価につながるのだ。

橋下氏の改革には賛否がある。私自身、多くの疑問を持っている。だが、彼に対して距離を置いていた職員も、「『こなし』がなくなって本当に楽になった」と認めていたことも確かだ。

■安定か閉塞か

０９年、私は支局の次長（デスク）として、和歌山に戻る。記者として過ごした激動の６年間と比べると、１０年までのデスク生活は、総選挙などもあって多忙だったはいえ、新聞の一面を連日にぎわせるような出来事もなく打って変わって平穏な２年間だった。

０６年に当時の知事が、官製談合に絡んで逮捕される事件があったが、和歌山に「橋下徹」的な存在は幸か不幸か登場しなかった。曲折はあったものの、圧倒的な勢力を誇る自民党と、県庁をはじめとする官僚組織が連携する構造には、大きな変化が起きなかった。その枠組みの中で、漸進的に改革を進めているのが、現在も含めて和歌山の姿だろうか。

２００５年の郵政選挙、０９年の政権交代、１２年の自公による政権奪還と、ここ１０年余りの間に政界が全国的には激変してきたが、県内の衆院３小選挙区の勝敗をみると、０５年に自民が全勝、０９年に民主が自民に２勝１敗と勝ち越したものの、その後は自民２勝、民主１勝が続いていて変化は乏しい。

一方、大阪は政治的には、タレント出身の知事や国会議員を多く輩出したように、保守勢力の基盤がそれほど強くなく浮動票が多い。選挙のたびに勝者が入れ替わってきた。小選挙区は、０５年には自民が１３選挙区を制して圧勝、公明４、民主２だった。しかし政権交代が実現した０９年は民主が１７勝して圧勝し、自民はわずか１、公明ゼロ、社民１。１２年は自民３、公明４、維新１２▽１４年は自民９▽公明４▽維新５、民主１――という具合だ。

和歌山のような政治状況は安定を生み、あしきポピュリズムに脅かされることなく施策を進められるが、閉塞と弛緩を招くリスクがある。大阪のような風土は、民意を鋭く反映して緊張と変化を生むが、一貫性がなく大衆迎合主義に陥るリスクがある。

■ＩＲと熊野

ところが今、改革を掲げる維新がかじ取りする大阪も、保守勢力が盤石にみえる和歌山も、歩調を合わせるかのように、開発による活性化策に取り組んでいる。

大阪は、五輪の招致活動の際に選手村の候補地だった人工島に万博を誘致し、さらに統合型リゾート（ＩＲ）の開発地にしようとしている。

和歌山もＩＲの誘致に動き、和歌山マリーナシティを候補地としている。

いつか失敗した道を再び歩もうとしているのか、違うのか。

県内の観光客数は、東日本大震災と福島第１原発事故の影響による減少が一時あったが、２０１６年には約３５００万人近くとなり、１９５９年の調査開始以来最多を更新している。外国人宿泊客も約５０万人と前年比１７％増で過去最多だった。

外国人のうちフランスなど欧米からの観光客は、高野山や熊野古道の宗教や伝統文化、自然を好むという。これらの地域の魅力は、和歌山が辺境だったゆえに培われた面もあるだろう。神秘性などの魅了が、ＩＲの存在で毀損されないか、検討を要する。ただ、これらの地域に外国人が多く訪れるようになったのは、日本の出迎え口である関西国際空港からの近さも、その一つの要因であり、開発がその隆盛を促したともいえる。

また、中国や台湾、香港などアジアからの観光客は、和歌山マリーナシティのマグロ解体ショーの人気が高かったり、ラーメンや日本食などグルメ、果物狩りといった体験型に関する関心が高いという。

開発と自然保護の関係をどうバランスさせるべきなのか。もちろん観光だけが産業ではないし、産業だけでなく住環境にも目を向けねばならない。ＩＲについて、県はさまざまな規制によってギャンブル依存症など負の要素を減らそうとしているが、住環境にとってプラス面を探すことは難しい。そもそもの倫理的な問題も議論されるべきだ。

開発と自然保護の関係は永遠の課題だ。和歌山マリーナシティと熊野という９０年代に二つの博覧会が開催された地域が、それぞれを象徴するのも何かの因縁だろうか。結論を出すことは簡単ではないが、答えを私なりに探していきたいと思っている。